

2020年1月

第112号

ぱれっと



(株)北日本ベストサポート
Tel. 018-883-1888



年頭に当たって（1年を振り返って）

あけましておめでとうございます。

清々しい希望に満ちた新年をお迎えのこととお慶びを申し上げます。

さて、昨年1年を振り返ってみますと、国内では4月30日平成天皇がご退位され、5月1日に皇太子徳仁親王殿下が126代天皇に即位されました。

元号も「令和」となり10月22日には即位を祝うパレードで約12万人にも及ぶ国民が沿道で祝福し、皇后雅子さまが目頭を押さえる場面もあり印象的でした。

スポーツ界ではアジア初開催となるラグビーワールドカップ日本大会が9月に開催され日本代表が念願の八強入りを果たし勇敢な戦いぶりは多くのファンに熱狂的感動を与えました。また、1月にはテニス全豪オープン女子シングルスで大坂なおみ選手が日本勢初優勝。8月には女子ゴルフの全英女子オープンで渋野日向子選手が日本勢で42年ぶりとなるメジャー優勝を果たしました。ラグビー日本代表のチームスローガン「ONE TEAM(ワンチーム)」は年末の新語・流行語大賞に選ばれました。

悲しい出来事も重なりました。7月には「京都アニメーション」第1号スタジオへの放火事件があり死者36名、負傷者33名にも上る大惨事となりました。9月から10月にかけて千葉県や福島県など関東地方と東北地方で台風による記録的な大雨などによる大きな被害が相次ぎました。10月には沖縄の象徴的な世界文化遺産の「首里城が焼失」しました。

国際的には日韓関係が最悪の状態となり人的交流の停滞や日本商品の不買運動などが起こりました。香港では一国二制度崩壊に繋がるような政策に対して香港住民の大規模なデモが続き大混乱となり、11月区議会選挙では「政府に対して5大要求」を求めている民主派が大勝利を収めたものの、收拾のメドが立っていません。また、米中貿易摩擦が世界経済に微妙な影響を与えています。北朝鮮は相変わらずミサイル実験を繰り返し、米朝会談も膠着状態が続いています。地球温暖化防止を訴えるスウェーデンの女子学生の演説が話題を呼びました。英国のEU離脱問題など世界は様々な軋みが生じています。

さて、2020年はどんな年になるのでしょうか。「米中対立・貿易戦争の行方」「ITとの関連で大幅な産業構造の変化」「気候変動リスク」「デジタルマネーの実用化」(中国の人民元電子マネー発行計画)など目を離せない問題を抱え成行きが注目されます。

今年の干支は子年。ねずみは子供を沢山生むところから子孫繁栄の年とされています。「泰山鳴動してねずみ一匹」とか「窮鼠猫を噛む」等と言うことのないようしっかり地に足をつけた実り多い年としたいものです。



(中国古典の知恵に学ぶ)



心にゆとりを持つ

歳月は、もともと悠久なのだが、忙しく気ぜわしい生き方をしている人は、自分でそれを短くしている。

また、世の中はもともと広いものだが、自分勝手に人情の薄い人は、自分でそれを狭くしている。

春には花を愛で、夏には涼しい風を求め、秋には名月を眺め、冬には雪景色を楽しむ。

こうした四季折々の風情は、もともと心にゆとりをもたらすものだが、あくせく仕事をしている人にとっては、わずらわしいものでしかなくなってしまう。

(後集 4)

清らかで正しい心を守り続ける

奥深い山の中で隠遁生活をしている人は、貧乏ではあるが、私利私欲とは無縁の、俗世間を超越した風情がある。田舎の農夫は、粗野ではあるが、純真な心をもっている。

都会で悪賢い商売人の仲間にも身を落とすくらいなら、たとえ野垂れ死にしたとしても、最後まで清らかで正しい心を持ち続けたほうがよい。

(後集 126)

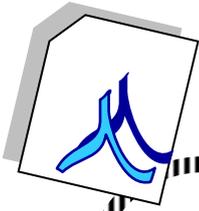
自然の美しさに目を向ける

名誉や金儲けばかり考えている人は、とにかく「世間は汚い、世の中は頭を悩まし苦しませることだらけだ」とぼやく。しかしそれは、彼らが目先の損得にとらわれるあまり、自然の美しさに目を向けないからだ。

雲は白く、山は青く、川はさらさらと流れ、岩はそそり立っている。野には美しい花が咲き乱れ、鳥はさえずり、谷にはこだまし、木こりが歌っている。世の中には、こんな美しい世界もあるのだ。

この世は汚れてもいないし、苦しいことばかりが起きるわけではない。そうさせているのは、自分自身の心である。

(後集 122)



福澤 諭吉 (蘭学者・啓蒙思想家・教育者)

1835年1月10日(天保5年)	豊前国中津藩(現大分県中津市)で下級藩士・福澤百助と妻於順の次男として生まれる。
1840年(5歳)	藩士・服部五郎兵衛に漢学と一刀流の手ほどきを受ける。14・15歳頃から勉学に励む。18歳頃「論語」「孟子」「詩経」「史記」「左伝」「老子」などの学問の傍ら立身新流の居合術を取得。
1854年(安政元年)	19歳で長崎に遊学、蘭学を学ぶ。
1855年	蘭学者・緒方洪庵の適塾(後の大阪大学)に学ぶ。
1857年(安政4年)	最年少22歳で適塾の塾頭となる。
1858年(安政5年)	江戸で蘭学を教える。この蘭学塾「一小家塾」が慶應義塾の基礎となる。
1859年2月(安政6年)	日米修好通商条約批准のため咸臨丸で渡米。
1862年1月(文久2年)	随政使節の翻訳方として随行。(27歳)
1867年2月(慶応3年)	江戸幕府の軍艦受取委員会随員として再渡米。
1868年(慶応4年)	蘭学塾を慶應義塾と名づけ教育活動に専念する。
1872年	「学問のすすめ」初編発行。
1901年2月3日(明治34年)	脳溢血のため死去。享年66歳。

オススメの BOOK



『論語と算盤』(上・下)

著者 渋沢 栄一 訳者 奥野 宣之 出版社 致知出版社

渋沢栄一は日本における「資本主義の父」として知られています。豪農出身でありながら尊皇攘夷運動に参加。後に、徳川家一橋慶喜に使え、28歳で徳川昭武のお供として渡仏。ヨーロッパ文明を学んだ。明治維新後に帰国、新政府の官僚となって新国家造りに活躍するが財政改革の主張が受け入れられず退官し、実業家となった。

道徳(論語)を基礎に置き産業を発展させ国を豊かにして強兵でなければ世界に遅れを取るとの考え方から、産業の発展に寄与、500社以上の経営に関与した。

この本は、渋沢栄一の経営の基本、実業家としてのものの考え方について示唆に富む書物だ。2024年には1万円札の肖像に決定している。

職場の教養1月号から2話ご紹介します



諦めずにあとひと押し (初志を貫きましょう)

一月は、新年の行事などにおいて、一年の仕事の抱負を述べたり、新たな目標を掲げたりする機会があります。

目標を立てることはできたとしても、その後はどうでしょう。年の初めに決意したこと、掲げた目標などがうやむやになってはいないでしょうか。

出だしは順調でも、想定外の仕事に追われるうちに、思うようにいかなくなることはあるものです。

こうした事態に直面した時こそ、自分自身の真価が問われるでしょう。いったん志したこと、やると決めたことは最後までやり抜きましょう。たとえ時間を費やしても、押し押し押し通すということも大切な精神です。

自分で決意したことや自分との約束は、うまくいかなくと、様々な理由をつけて諦めてしまいがちです。

たとえ小さな目標であっても、成し遂げれば自信になります。諦めずもう一步、あとひと押しと、自分が掲げた目標に向かって進みたいものです。

足元を固める (見えない仕事も大切にしましょう)

目の前に「大きな木」と「小さな木」があるとします。見えない地下にある根は、どういう状態だと思いますか？

根が地中に深く、広く張っている木の幹は太く、枝葉を大きく伸ばします。木の大小は根の深浅に比例するのです。

大きな働きを成している人や、職場の共通点に「見えない部分を大切にすること」があるでしょう。

「お客様がいる時は、しっかりしよう」「ユーザーが目にする部分はいいねに」というような表面を取り繕うだけの仕事は、一時的には成果を上げているように見えます。しかし、少しの綻びから、瓦解する危険性が高いものです。

それに対して、根が深い大樹は強風が吹いても倒れることがないように、見えない部分を大切にすることは永続的な繁栄の基となるのです。

時には「自社の、我が部門の根にあたる仕事は何か」を確認して、地下の根にあたる部分を拡充しつつ、大きな仕事を成し遂げていきたいものです。

果樹を植えたら、その実がなるまでには相応の年月がかかる。例えばモモやクリは3年、カキは8年。より時間が必要な果樹もある。よし、自分はずっと長く精進するぞ！と90歳まで筆を執り続けた作家が武者小路実篤。その実篤が好んで色紙に書いた言葉が「桃栗三年柿八年…俺は一生」精進を重ね生涯前進の人生を送りましょう！！



岩手県雫石<玄武風柳亭>
貸切露天風呂で雪見はいかが



【編集後記】

1年を過ごしてみると、なんでこんなに月日が早く過ぎ去ってしまうのだろうと思わずにはいられない。

それだけ早く歳を重ねていることだし、筆者の年齢になると、どんどん何かの迫ってくる感じがしている。

要は限られた人生、悔いのない日々を送らなければならないと急かされているのかもしれない。

「生きてる間は生き生きと生きよ」をモットーに明るく楽しく充実した日々を送りたいと願うと同時に新しい年が健康で平和な年となるよう心から祈っている。